

夏目漱石

入社  
の  
辞



入  
社  
の  
辞



大学を辞して朝日新聞にはいったら逢<sup>あ</sup>う人が皆驚いた顔をしている。なかにはなぜだと聞くものがある。大決断だと褒<sup>ほ</sup>めるものがある。大学をやめて新聞屋になることがさほどに不思議な現象とは思わなかった。余<sup>よ</sup>が新聞屋として成功するかせぬかはもとより疑問である。成功せぬことを予期して十余年の径路を一朝に転じたのを無謀だと言って驚くならもつともである。かく申す本人すらその点については驚いている。しかしながら大学のよ

うな栄誉ある位置を抛ほうつて、新聞屋になつたから驚くというならば、やめてもらいたい。大学は名誉ある学者の巢を喰くっている所かもしれない。尊敬に価する教授や博士が穴籠あなごもりをしている所かもしれない。二三十年辛抱しんぼうすれば勅任官になれる所かもしれない。その他いろく便宜のある所かもしれない。なるほどそう考えてみると結構な所である。赤門を潜もぐり込んで、講座へはい上ろうとする候補者は——勘定してみないから、幾人あるか分わからないが、いちく聞いて歩いたらよほどひまを潰つぶすくらいに多いだろう。大学の結構なことはそれでも分る。余

も至極御同意である。しかし御同意というのは大学が結構な所であるということに御同意を表したのみで、新聞屋が不結構な職業であるということに賛成の意を表したんだと早合点はやがてんをしてはいけない。

新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなからう。月俸げっぼうを上げてもらう必要はなからう。勅任官になる必要はなからう。新聞が商売であるごとく大学も商売である。新聞が下卑げびた商売であれば大学も下卑げびた商売である。たゞ個人として営業しているのと、上かみで御営業になるのとの

差だけである。

大学では四年間講義をした。特別の恩命をもつて洋行をおおせを仰つけられた二年の倍を義務年限とするとこの四月でちょうど年期はあけるわけになる。年期はあけても食えなければ、いつまでも噛み付き、獅噛みつき、死んでも離れないつもりでもあった。ところへ突然朝日新聞から入社せぬかという相談を受けた。担任の仕事はと聞くとたゞ文芸に関する作物を適宜の量に適宜の時に供給すればよいとのことである。文芸上の述作を生命とする余にとつてこれほど難有いことではない、これほど心持ちの



よい待遇はない、これほど名誉な職業はない。成功するか、しないかなどと考えていられるものじゃない。博士や教授や勅任官などのことを念頭に掛けて、うん／＼、きゆう／＼言っていていられるものじゃない。

大学で講義をするときは、いつでも犬が吠<sup>ほ</sup>えて不愉快であった。余の講義のまずかったのも半分はこの犬のためである。学力が足りないからだなどは決して思わない。学生にはお気の毒であるが、まったく犬の所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>だから、不平はそつちへ持って行っていたゞきたい。

大学でいちばん心持ちの善<sup>よ</sup>かったのは図書館の閲覧室

で新着の雑誌などを見る時であつた。しかし多忙で思うようにこれを利用することができなかつたのは残念至極である。しかも余が閲覧室へはいると隣室にいる館員が、むやみに大きな声で話をする、笑う、ふざける。清興を妨げることは莫大ばくだいであつた。ある時余は坪井学長に書面たてまつつを奉て、恐れながら御成敗を願つた。学長は取り合われなかつた。余の講義のまずかつたのは半分はこれのためである。学生にはお気の毒だが、図書館と学長がわるいのだから、不平があるならそつちへ持つて行つてもらいたい。余の学力が足らんのだと思われてははなはだ

迷惑である。

新聞のほうでは社へ出る必要はないと言う。毎日書齋で用事をすればそれで済むのである。余の居宅の近所にも犬はだいぶいる、図書館員のように騒ぐものも出て来るに相違ない。しかしそれは朝日新聞とはなんらの関係もないことだ。いくら不愉快でも、妨害になっても、新聞に対しては面白く仕事ができる。雇人が雇主に対して面白く仕事ができれば、これが真正の結構というものである。

大学では講師として年俸八百円を頂戴していた。子供

が多くて、家賃が高くて八百円ではとうてい暮せない。  
仕方しかたがないからほかに二三軒の学校を馳かけあるいて、よう  
やくその日を送っていた。いかな漱石もこう奔命につか  
れては神経衰弱になる。その上多少の述作はやらなければ  
ならない。酔興すいきように述作をするからだと言うなら言わ  
せておくが、近来の漱石は何か書かないと生きていく気  
がしないのである。それだけではない。教えるため、ま  
たは修養のため書物も読まなければ世間へ対して面目が  
ない。漱石は以上の事情によって神経衰弱に陥おちいつたの  
である。

新聞社のほうでは教師としてかせぐことを禁じられた。その代り米塩べいえんの資に窮せぬくらいの給料をくれる。食ってさえゆかれればなにを苦しんでザツトのイットのを振り回す必要がある。やめるとなと言つてもやめてしまふ。休やめた翌日から急に背中が軽くなつて、肺臓に未曾有みぞうの多量な空気がはいつて来た。

学校をやめてから、京都へ遊びに行つた。その地で故旧と会して、野に山に寺に社に、いずれも教場よりは愉快であつた。鶯うぐいすは身を逆さかしまにして初音はつねを張る。余は心を空にして四年来の塵ちりを肺の奥から吐はき出した。これ

も新聞屋になつたお蔭かげである。

人生意気に感ずとかなんとか言う。変り物の余を変りに適するような境遇に置いてくれた朝日新聞のため、変り物としてできうる限りを尽すは余の嬉うれしき義務である。

(明治四〇・五・三)







日本文学電子図書館

---

入社の辞

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 4 卷」角川書店

昭和41年 4 月20日 7 版発行

---

日本文学電子図書館